

考として、保育上欠くことの出来ない変化をとりあげ、月別、項目別の表とする。

結果の考察 (1)他の年令より、なお一層、月令による発達差がはっきりあらわれている。(2) 心理的にみた各年令の発達の特徴が、行動にそのままあらわれていることが多い。(3) 年々三才児がしっかりしてくるよう感じられていたが、集団としての行動や、保育材に対する適応の仕方には、あまり変化がみられなかった。(4) 三才児に適した保育方法や保育技術が考えられなければならない点のはっきりした。(5) 保育材、とくに、お話、歌、曲なども同様、三才児に適したものが創作されてゆかねばならない。

幼児期に芽ばえた

神仏観念の調査(第二報)

東京・神田寺幼稚園 友松あきみち

井山不二子

高園 敏子

昨年の保育学会では幼児期の神仏観念がどのように現われ、どのような内容をもって発達していくか、また幼稚園においての宗教教育が幼児にどのような影響を及ぼすかを、神社、仏教寺院、キリスト教の旧教と新教、個人立、あわせて都内一九園の幼稚園児を対象にして調査報告した。今年度は歴史的な人物としての敬尊を、その宗教教育の中心として扱っている当園園児を対象にして、幼児期の神仏観念がその成長発達にしたがってどのように変化するかを、年令、知能、情緒、家庭環境との関係において調査した。

調査方法は個人面接による発問法ならびに描画を併用したもので

内容は昨年度と同じ。その他の調査としては描画における色の傾向、性格情緒面の検討、祖父母の有無などについておこなった。

昨年度に引き続いた調査から結論としていえることは、神観は四才になって、ほぼ確立をみるようであり、知能の高い者は、すでに五、六才にかけて神を至上至善のものとする一つの世界観に到達することが出来るようである。

保育施設や、家庭環境において、特別に宗教教育をほどこさずとも、今日幼児を取り巻いている環境が、このような世界観を作り出す方向にあるということは、幼児期の道徳意識もまたそのような生活基盤をもっているということが言えよう。この調査は、その意味で今後諸外国の神仏観について対比を求めると同時に道徳教育についての基礎資料を見出す役目をはたしたいと考えている。

幼児教育誌を通じてみたわが

国保育界の動向(第三報)

——特に幼稚園令制定前後の事情を中心として——

尚綱女学院短期大学 本 田 和 子

前回と同様、「婦人と子ども」誌を継続的に考察することにより、幼稚園令制定に至る大正期保育界の歩みを跡づけようとした。誌上の諸記事を分類整理して、発表頻数の多いものを中心に、主として次の二つの面から考察した。すなわち、当時の保育界の内的事情と、保育界をとりまく外部社会一般の保育界に向ける関心・態度などの、二つの面からその動きを捉えることを試みた。

結果としては、幼稚園令制定に至らしめた原因として次のような